博士研究相談（2015.6.18）

前「三項関係に着目した幼児の物語行為を支援する学習環境デザインに関する研究」
案①「デジタルメディアを用いた幼児の物語行為を支援する学習環境に関する研究」
案②「幼児の物語行為を支援するデジタルメディアのデザインによる学習環境の検討」

D3 佐藤 朝美

【前回のコメント】

- 本博論で取り扱うナラティブスキル支援の文化的な位置づけを行う
- 社会文化歴史的研究の領域から博士論文の筋立て（章立）をつくる
- 21 世紀型スキル、幼稚園教育要領を封印

【本日の相談内容】

1）博論構成の検討

【夏学期の発表予定】

• 本博論で取り扱うナラティブスキル支援の文化的な位置づけを行う	→5月 28 日発表
• ★再チャレンジ★本博論で取り扱うナラティブスキル支援の文化的な位置づけを行う	→7 月 2 日発表
• ジェンダー（母親に特化する理由）に関する説明と題名等	→7月１６日研究相談

１）博論構成の検討

■安斎くんの章の構成

第３章
創発コラボレーションを生じるために課題に「矛盾」を入れるデザイン

第４章
創発コラボレーションを生じるために活動に「アナロジカルジグソー」を入れるデザイン

【目的】
創発コラボレーションを促すためのワークショッププログラムのデザイン原則提案すること

【前提①】
なぜ創発コラボレーションなのか？

【前提②】
なぜプログラムデザインが重要なのか？

- 雑多な WS 研究を整理→学習と創造に分けて整理
- WS の理論的背景（デューイとヴィゴツキー）の整理　→創発的コラボレーションという概念導出
- 現状の実践でも創発的コラボレーションの重要性を指摘、ただし、研究がされていない
- そこで、「グループワークを通して新たなアイデアを考えるタイプのワークショップにおいて、創発的コラボレーションを促すための効果的なプログラムのデザイン原則を提案すること」を目的とする

■池尻くんの章の構成

第３章
歴史の因果関係を現代の問題の原因分析に応用する力を育成するゲームの開発

第４章
歴史の解決方法を現代の問題解決方法生成に応用する力を育成するゲームの開発

【目的】
歴史的類推を現代の問題解決に応用する力を育成する学習方法を開発すること

【前提①】
なぜ歴史的類推を学習する必要があるのか？

【前提②】
なぜゲーミング・シミュレーションなのか？

社会的背景

- 歴史の価値について吟味―歴史観の1つ循環的歴史観からみた2つの価値→歴史的類推の意味
  歴史の因果関係を現代の問題の原因分析に応用する
  多様な歴史の解釈法を現代の問題の解決法生成に応用する
- 歴史学習の目標の吟味―学校教育に関するレビュー

研究的背景

- 歴史学習に関する先行研究の調査
- 歴史的類推に関する先行研究

→循環的歴史観の立場にたって、歴史的因果関係を正しく現代の問題解決に応用するためには、対応関係を正しく捉えさせたうえで相互にその類推を評価できることまで視野に入れた学習方法を開発することが必要

2 章では歴史的類推を促す学習方法の視座について考察

――――――>ここから自分の研究

■章の構成

第３章
幼児を対象にしたお話づくり支援のソフトウェアの開発

第４章
親の語りの引き出し向上を支援するオンラインコミュニティの開発

【目的】
NarrativeSkill 習得を支援する学習環境（メディア・オンライン環境）を構築すること

【前提①】
なぜ NarrativeSkill 習得を支援しなければならないのか？

【前提②】
なぜ母子の関係に着目する必要があるのか？

【前提③】
なぜテクノロジー（メディア）を使用するのか？
→第２章で方法論の検討

■用語の整理

本研究使用するNarrativeSkill（話す力）

- 体験や自分の考えを一連のまとまった物語(Narrative)として産出し、他者に伝える力
- その内容は,自分の過去の経験,空想の 話,誰かを主人公とした仮想の出来事など多岐にわたる(秦野 2001).

Peterson,C., Jesso,B., & McCabe,A. (1999) Encouraging narratives in preschoolers: An intervention study. Journal of Child Language,26, pp.49-67.

秦野悦子（編集）(2001) ことばの発達入門. 大修館書店,東京

【前提①】

第1章　研究の背景と目的

1.1　社会的背景

1-1-1　「話す力」の発達の整理

- どの文化コミュニティにおいても共通で、人はコミュニティの中で成長し、話す力は、「大人と子ども」のやり取りを基本として発達していく(ヴィゴツキーの最近接発達領域)
- どの文化コミュニティにおいても共通で、単語の記憶、概念の形成とともに語彙を発達させながら、2 語文、3 語文へと文章を形成できるようになるとともに、ある一かたまりの文章を伝えていくという話す力の発達の順序はほぼ同じ(ピアジェの発達段階)
- ただし、「大人と子ども」の関わり方は、コミュニティにより異なる(ロゴフらの研究)
  Ex)親子密着型、村全体による養育
- どのコミュニティの人間にも「意味」を物語的に構成し生成する生得的傾向(物語レディネス)が備わっている。人間は言語を通じて構築される存在であり、かつそれが物語的に構築される(ブルーナー「意味の復権」、「教育という文化」)
  ブルーナーは、ピアジェの段階的発達論からヴィゴツキーの社会文化的教育を主体とした発達論へと展開し、両者の融合というアプローチで、ナラティブ論を確立
- 「大人と子ども」の関わる方向性(目標や価値観)も、コミュニティにより異なる(ロゴフや東洋等の文化比較研究)
  Ex)学校文化のあるコミュニティ、あるいは、村落で徒弟制度のように仕事に参加していくコミュニティでは、求められる「話す力」が異なり、大人の接し方も異なる
  Ex)日米文化比較で見られたように親の関わり方や教育観が国ごとに異なる
- 話す(ナラティブ)の内容も、コミュニティにより異なる(ロゴフや東洋等文化比較研究)
  Ex)欧米の中産階級は詳細も話す、日本は俳句的、文化により好まれる語り方がある

→本研究では、文化歴史的に普遍とされる「大人と子ども」のやり取りと、発達のプ

ロセスの先行研究を基本に踏まえるとともに、時代で変化する内容（目標や価値観、語りの内容）については、現状の課題を検討し適切に提案する研究を行う
→1.2　で、現状の課題について研究から導出

1. 2　研究的背景

1-2-1「話す力」の発達研究からみた支援研究の現状

- 発達心理学や文化人類学、比較心理学、教育心理学では、言葉（Narrative）の発達のメカニズムやその要因（保育環境や親の教育方法・教育観）について明らかにしている研究が多々あるが、NarrativeSkill 習得の支援方法を検討する研究は少なく、国内では発達障害児への支援が数件みられるものの、健常児へは皆無である。
- 1-2-2 や 1-2-3 で述べるように NarrativeSkill 習得は重要な課題になっているため、支援方法を検討する研究が必要である

1-2-2 家庭教育・子育て支援研究からみた NarrativeSkill 習得支援研究の必要性

- 文化歴史的にみて、コミュニティは常に変化するものと言われている。日本においては、核家族化や親の長時間労働、地域コミュニティの崩壊で、家庭の教育力の低下が指摘され、まさに、コミュニティが変化している状況である。そこで、家庭教育に関する研究（しつけや課程での教育の実施状況、稽古等の調査）や子育て支援研究（虐待防止や育児ストレス、食育、働く親支援に関する研究）が多々みられる。ただし、NarrativeSkill を支援するための家庭支援・子育て支援の研究はみられない。
- 日本における Narrative 習得でも、家庭における親の役割が重要といわれている。その重要な要因の1つである家庭環境が変化している現状を踏まえ、家庭支援・子育て支援研究のアプローチからも支援方法を検討する研究が必要である

1-2-3 幼少連携研究からみた NarrativeSkill 習得支援研究の必要性

- 文化により好まれる語り方（Narrative）があるが、幼小連携に関する研究における言葉の課題から、現状の俳句的共感的であった語りの特徴には、支障が生じているといえる。
  （本当はここで、グローバル化や問題解決型学習が必要と認識される現在、求められる「話す力」も変化しているといいたい…）
- 幼小連携研究では幼少の活動の提案や小学校の先生と保育園の先生との差異を明らかにする等様々な取り組みが行われているが、言葉の支援研究も行われるべきである。求められる Narrative に変化が生じている現状を踏まえ、習得目標を設定し、支援形態を検討する研究が必要である

以上から、NarrativeSkill 習得の目標とその支援形態である学習環境を検討することが必要であり、本研究では、その要件を満たす NarrativeSkill 習得を支援する学習環境（メディア・オンライン環境）を構築することを目的とする。

【前提②】

第1章　研究の背景と目的

1.1　社会的背景

1-1-2　「話す力」の発達に関わる性差の整理

- 歴史的にみて、女性が子育てを担うようになった経緯、さらにはこれまでと異なっている現状を概観する
- 女性の社会進出に伴い、家庭教育における母親の役割の大きさに変化が生じている
- 一方で、ハイパー・メリトクラシー化のなかで実際に重要な役割を担っている母親の状況もある（本多由紀先生『「家庭教育」の隘路−子育てに強迫される母親たち』）。
- 発達心理学研究では、男性研究者が母性神話を背景的理念に持ちつつ母子研究を行ってきたという指摘もある
- NarrativeSkill 研究では、母子（娘）対話、母子（息子）対話、父子（娘）対話、父子（息子）対話等、性差に関する研究もおこなわれている
-

【前提③】

第2章　研究の視座

2.1　NarrativeSkill 習得の支援方法の検討

2-1-1　Narrative を媒体するメディアの変遷

- 物語の伝承方法や支援におけるメディアの進化　口頭→絵本→映像→・・・
- 現在のテクノロジーで支援できる方法として直接呈示とオンラインコミュニティ等可能性がいろいろある

2-2-2　子どもの NarrativeSkill の発達と支援方法の検討

- 絵本研究や物語作りに関わる研究により、媒体による支援方法を導出

2-2-3　親の語りの引き出しに関わる支援方法の検討

- 絵本研究や親の対話スタイルに関わる先行研究により、親の支援方法を導出

■ブルーナーのナラティブ研究

■トマセロの研究

社会的背景
理論的背景→分厚くする
並べるだけでなく、悩む

形式だけでなく、そもそも論　何が大事なのか？

咀嚼してレビュー　並び方にオリジナリティとカテゴリー
オリジナルな視点　何故その視点でまとめる
並べただけではだめ

1. 2は資源的背景

深見が足りない

1. 1での悩みを反映
2. 支援に深見が出てくる

家族の中で話す力　性差　枠組みは自分で決める
問題意識　何が付き動かしてる問題
幼児　原点
先人たちの肩に乗っかる
三項関係を導出
何故そこか、と

飲み屋での話す力
必然性を導出
語る力　話す力　＝＞あらゆる人に必要だと信念
覚悟　：
支援研究、引いてみてる

第１章のタイトルを理論的背景とし、独自のパースペクティブで構成しなおす。
特に話す力、語る力を支援する意味や方法について、根本的に考えてみる。
ナラティブスキルと心中するつもりで頑張ります！

山内先生との研究相談
2015 年 6 月 18 日（木）

■相談内容
・第 1 章研究の背景と目的　の節構成について

■頂いたアドバイス
・1．1「社会的背景」を「理論的背景」とし、オリジナルな視点で理論を概観し、何故ナラティブスキルの支援が必要なのかという必然性を導出するよう構成しなおす。

・1．2「研究的背景」を「支援的背景」とし、1．1で検討した事項に対応するような内容とする。

・そもそも「話す力」、「語る力」を支援する意味や方法について、根本的に考えてみる。

■課題
・第 1 章で博論の意義を研究的視点から述べるためにも理論背景を網羅し、吟味し、独自の視点で構成しなおす
・性差やデジタルメディアについてはその後の作業となるが、位置づく可能性がある箇所があれば章構成の仮位置を設定してみる

山内先生、お忙しい中ありがとうございました！

ナラティブスキルと心中する覚悟をしたいと思います！